富 木 殿 御 返 事

文永一〇年七月六日　　五二歳

鵞目二貫給び候ひ了んぬ。太田殿と其れと二人の御心か。

伊与殿は器量物にて候ぞ。今年留め候ひ了んぬ。御勘気ゆりぬ事御歎き候べからず候。当世日本国に子細有るべきの由之を存す。定めて勘文の如く候べきか。設ひ日蓮死生不定なりと雖も、妙法蓮華経の五字の流布は疑ひ無き者か。伝教大師御本意の円宗を日本に弘めんとす。但し定慧は存生に之を弘め円戒は死後に之を顕はせり。事相たる故に一重の大難之有るか。仏滅後二千二百二十余年、今に寿量品の仏と肝要の五字とは流布せず。当時果報を論ずれば、恐らくは伝教・天台にも超え竜樹・天親にも勝れたるか。文理無くんば大慢豈之に過ぎんや。章安大師天台を褒めて云はく「天竺の大論すら尚其の類に非ず、真旦の人師何ぞ労はしく語るに及ばん、此誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云。日蓮又復是くの如し、竜樹・天親等尚其の類に非ず等云云。此誇耀に非ず法相の然らしむるのみ。故に天台大師、日蓮を指して云はく「後五百歳遠く妙道に沾はん」等云云。伝教大師当世を恋ひて云はく「末法太だ近きに有り」等云云。幸ひなるかな我が身「数々見擯出」の文に当たること、悦ばしいかな悦ばしいかな。諸人の御返事に之を申す故に委細は止め了んぬ。

七月六日　　日　蓮　花　押

土木殿御返事